

長野県総合計画審議会

- 開催日時 平成29年6月12日（月）15：00～17：00
○開催場所 長野県庁3階 特別会議室
○出席者
委員 安藤委員 春日委員 小林委員 近藤委員 園原委員 中畠委員
中條委員 中山委員 野原委員 畠山委員 濱田委員 藤原委員
山浦委員
長野県 小岩企画振興部長 船木参与（信州総合ブランディング担当）
伊藤総合政策課長 宮島企画幹 ほか

1 開 会

（宮島企画幹）

それでは、定刻となりましたので、ただいまから長野県総合計画審議会を開会いたします。私は、本日の司会を担当いたします総合政策課の宮島克夫と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

最初に、審議会委員の委嘱について報告をさせていただきます。長野県市長会の役員改選に伴いまして、4月20日付けで三木正夫委員から辞任届が提出されました。後任の委員といたしまして、本日付で、新しい市長会長であります小口利幸塩尻市長に委嘱申し上げましたので、ご報告いたします。

次に、定足数の確認でございますが、本日は、小林委員が若干遅れておられますが、現在12名、小林委員が到着されますと13名の委員にご出席をいただいておりますので、本審議会条例第6条第2項の規定によりまして、会議が成立していることをご報告申し上げます。なお、小口利幸委員、関隆教委員は、本日、都合により欠席をされております。

それでは、審議に先立ちまして、小岩企画振興部長からごあいさつを申し上げます。

2 企画振興部長あいさつ

（小岩企画振興部長）

企画振興部長の小岩でございます。本日も、委員の皆様方におかれましては、ご多用中にもかかわらず、第4回となります総合計画審議会、ご出席をいただきまして、まことにありがとうございます。

県民の皆様とともに策定し、実行する総合計画、また、これまで以上に地域編を重視するというコンセプトのもとでつくっていきたいという総合計画でございますが、この4月以降、地域振興局ごとの地域戦略会議というものを、それぞれの地域で、順次、開催しております。現在のところ、10の地域のうちの7つの地域で開催しております。こういった場で、知事とそれぞれの市町村長の皆様方との間で、地域の課題ですとか今後の方向性、こういったことについて、直接意見交換をさせていただいているところでございます。

また県内の若者の皆様、企業の皆様はもちろん、長野県出身の学生と東京で意見交換を

行うといったことも行っておりました、こういったさまざまな機会を通じて、皆様との対話を重ねながら、この総合計画についての考え、議論を進めているところでございます。

こうした意見、またこれまでの審議会でもいただいたご意見も踏まえまして、県庁及びそれぞれの地域振興局におきましては、次の計画に盛り込む内容、政策につきまして、検討を加速させているところでございます。

本日でございますけれども、重点的に取り組む政策の方向性、また基本目標といった計画の基本的な考え方というところにつきまして、ご議論をいただきたいというふうに考えているところでございます。

委員の皆様におかれましては、濱田会長のもと、忌憚のないご意見を賜りますよう、お願い申し上げます。冒頭、簡単ではございますが、私からのごあいさつとさせていただきます。本日もどうぞよろしくお願いをいたします。

(宮島企画幹)

それでは、これより議事に入ります。会議の議長は、本審議会条例第6条の規定によりまして会長が務めることとなっておりますので、濱田会長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いをいたします。

3 会議事項

(1) 会長の職務を代理する委員及び土地利用・事業認定部会委員の指名について

(濱田会長)

皆さん、こんにちは。委員の皆様には、ご多忙の中、お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

先ほど部長の話にもございましたように、本日は、現状認識について、確認をいただいた上で、「重点政策の方向性」や「基本目標」など、計画の骨格にかかわる部分につきまして、議論をいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。それでは座って進行させていただきます。

最初に、「会長の職務を代理する委員及び土地利用・事業認定部会の委員の指名について」を議題とさせていただきます。先ほど事務局から報告がありまして、これまでお務めいただいております三木正夫須坂市長が辞任をされました。務めていただく委員は、本審議会条例第5条第3項及び第7条第2項の規定により、会長が指名することとなっております。

「会長の職務を代理する委員」及び「土地利用・事業認定部会委員」に小口利幸委員を指名いたしますので、よろしくお願いを申し上げます。

(2) 次期総合5か年計画の策定について

(濱田会長)

次に、「次期総合5か年計画の策定について」を議題とさせていただきます。事務局か

ら説明をお願いいたします。

(伊藤総合政策課長)

総合政策課長の伊藤です。本日はどうもありがとうございます。それでは、第4回長野県総合計画審議会資料をご覧いただきたいと思います。

1枚おめくりいただきまして、本日の論点といたしまして、3つ、お願いしたいと思えます。それごとにご説明いたしまして議論いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

まず2ページになりますが、論点の1つ目、現状認識についてということで、第1回目の審議会、去年の11月2日に開催されたわけですけれども、そのときに現状と課題とかデータをこちらでお示ししてご議論いただいたものでありまして、「長野県を取り巻く状況」、それから「長野県の特長」を整理したものです。これについて、本日、ご意見をいただければと思います。

3ページをお願いします。まず現状認識の1つ目として、長野県を取り巻く状況ですけれども、3ページ、4ページとして、1つは、3ページにありますように世界規模の動き、それから2として日本国内の動きということで、大きく2つ括らせていただきました。

3ページの世界の動きですけれども、大きく3つ、世界の結びつきの緊密化ということで、いわゆるグローバル化が進んでいることを掲げております。○の2つ目、急速な技術革新の進展ということで、第4次産業革命というようなことが言われていますけれども、そういったものですか、ここにはありませんけれど、シェアリングエコノミーの進展だとか、そういったことを記述したいと思えます。○の3つ目ですけれども、経済・社会・環境の持続可能性ということで、何回かご説明していますように、国連で採択されましたSDGsなどを踏まえていく必要があるということでございます。

4ページをお願いします。大きな2つ目として、日本国内の動きです。1つ目は、人口の減少、それから東京への一極集中というようなこと。それから長期低迷している経済の状況。これに加えて、インフラですとか家屋等の老朽化、遊休化も進んでいる。○の3つ目としまして、人と地域と言ったらいいんでしょうか、貧困・格差が拡大しているということで掲げてあります。

5ページをお願いいたします。国内の動きですけれど、まだ続きがありまして、人生100年時代ということで寿命が伸びていく、そういった中でどういう暮らしをしていくのか。2つ目としまして、リニアですとか、北陸新幹線ですとか、高速道路とか、どんどん延伸していきますけれども、そういった広域交通ネットワークの整備。それから間近に迫っています2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催です。

また、このほか、先ごろ閣議決定もされました国の動きですね。特にここに掲げてありますのは、どっちかというところ、あまり積極的じゃないという部分がありますので、少しポジティブな部分、国の成長戦略の動きなども、今後、踏まえていければいいというふうに考えております。

それから6ページですけれども、今までは長野県を取り巻く状況、それにプラス、長野県の特長というものも踏まえていく必要があるということで、大きく5つです。6ページの1つ目としては、自然環境ですとか、アクセスの関係ですとか、あと地域。多様な個性

を持つ地域ということで、環境とか地勢とかに着目したものとしてまとめました。

7ページは、どちらかという人とという観点になるんでしょうか。健康長寿県であること。それから地域の活動ですとか、産業ですとか、そういったものの自主自立の県民性というようなことで、この5つを長野県の特長として掲げたところです。

論点1については以上でございます。よろしく願いいたします。

(濱田会長)

ただいま論点1について説明をいただきました。それでその現状認識、2つに分けておりましたが、長野県を取り巻く状況というのと長野県の特長ということで、その順に議論をさせていただければと思っております。

まず長野県を取り巻く状況についてということで、県の政策を考える上で認識する項目として、3ページから5ページに記載された事項について、追加あるいは修正すべき点があるかどうか、ご意見をいただきたいというふうに思っております。

私が、先日、打ち合わせのときに申し上げたのは、今、政府で出している言葉として、ソサエティー5.0 (Society 5.0) というのを、割と大きくいろいろなところに打ち出しております。それは超スマート社会というような形で訳されているんですけども。全体的に言うと、そういう方向性というのが、将来に向けて日本政府が、今、打ち出している点ですので、その辺も踏まえながら、ぜひご意見を頂戴できればというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。どなたからでも結構でございますが、安藤委員からぜひお願いしたいと思います。

(安藤委員)

この長野県を取り巻く状況の中で、一般的な印象ですが、世界は極めてダイナミックに動いている。もちろん格差の問題、貧困の問題、テロとかありますが、でも、随分、動態的な感じがするんですよ。

日本は、一転してネガティブな感じのことばかりがここに書いてあるような感じを受けます。

その中で、長野はどうか。長野の場合は、何か非常にスタティックなんですね。ダイナミックな感じがしないというか。非常におとなしくていいんですけども。もう少しダイナミズムを感じるようなものにしたい。

長野県を取り巻く環境の部分があまりスタティックになってしまうと、次の重点施策の方向が、これに縛られても困るなど思っています。

そういう中では、一つだけ足したいところは、世界の大きな流れです。例えば日本が元気のよかった70年代とか80年代というのは、日本のGNPなんか世界で18%もあって、アメリカと足すと42%位で、大体、世界の半分はこの2つの国だという勢いがあったわけです。ところが、今は、日本は世界で3番目ですけども、将来、2050年ぐらいになると、1.9%とか2%になってしまっていて、その頃は現在のメンバー国でG7に残っているのはアメリカぐらいになってしまう。

何が変わっていくか、やっぱりアジアの新興国がものすごく出てきているわけですね。特に日本はアジアにあるわけですので、アジア圏の台頭により、2040年とか50年になると

全世界のGNPの50%を占めるような状況になります。日本はアジア圏の成長をどんどん取り入れて成長していくことを、私は、日本の将来の発展という意味で大いに期待しているところもあります。その意味からも、アジア経済圏の台頭を私は4つ目ぐらいに加えてもいいのではないかと思います。

(濱田会長)

確かにこれからアジア。その後、多分、アフリカが相当出てくるんじゃないかと思うんですが。日本はアジアにありますので、その辺の軸足的なものは重要な点かと思えます。ほか、どなたからでも結構ですけれども、取り巻く状況について、何か追加する点等ございますでしょうか。では、順番で春日委員、何かありましたら。

(春日委員)

取り巻く環境というところでいけば、私ども、農業関係は特に高齢化が進んでいるという部分のところで、担い手対策もいろいろやっていて、田園回帰の動きもあるっていうのはありますけれども、私たちもやりたいとかいう方も大分出てきてはいるんですけども。全体的には高齢化をした中でのいうところを、やはり一番認識しておかなきゃいけないんだと思っておりますし。そのために、そういう高齢化したところも、地域として存続させていく活動もやはりしていかなきゃいけないのではないかと。そのところに農業が一つこう、うまく所得もあって生活していけるっていうようなところをつくり込んでいくっていうのも、片方では考えなきゃいけないんじゃないかなと。当然、若い皆さんで法人化してどんどんこう輸出も増やしてやっていくっていう方たちも必要なんですけども。逆にこう、地域で残っていなきゃ、そこに住んでいてはいけないうわけにはいかないんで、それをやはり考えるということも必要だということで、環境、取り巻く状況という点では、ここまで現状ということできちんと入っているんで、いいのかなと思えますが、そういう点も含めていつていただきたいと思えます。

(濱田会長)

農業も、これから、多分、いろいろな技術を取り入れてということになってくるんじゃないかというふうに思えますので、その辺、あわせてかと思えます。

(小林委員)

全体的にいて、本当に今の時代の流れとか変化のポイントを捉えられた、非常にうまくまとまった資料だなと思って拝読いたしました。事務局の皆様に御礼申し上げます。

1点だけ。3ページの中で、せっかくその世界規模の動き、技術革新の急速な進展に伴って、人間固有の能力が重要になってくるというふうに触れていただいたので、もし可能であれば、6ページ目の長野県の特長の中に、1豊かな自然環境、とございますのでこの中で、例えば自然を生かした体験や教育などにも触れていただけませんか。長野県の場合は、「信州やまほいく」でしたか、認可されたりですとか、全国に先駆けて自然を非常に取り入れた教育が始まっていると思えますので。ただ、全体の流れを鑑みてここで教育に触れることが不自然であるというご判断であれば、ご放念ください。

(濱田会長)

私も、先日、ライチョウの研究で有名な中村名誉教授とお話ししたら、やっぱり、何でもそういう研究ができたかっていうのは、子どものころにやっぱり自然に触れる教育を自分は受けたからだということは強くおっしゃっておいりました。そのあたり、長野県としては、特長として出せる点なのかなというふうには、私も感じております。

ほか、いかがでございましょうか、取り巻く状況と、その後、長野県の特長に行くんですが、あわせて発言いただいてももちろん結構でございます。

(中山委員)

あわせてということで、長野県の特長で、いわゆるSWOT（スウォット）分析でいくと、強みとか弱みとか、あるいは機会とか脅威ってあるんでしょうけれども。この長野県の特長を見ると、決して悪くないんですけど、強みがずっと並んでいて、その弱み、前回、申し上げたかどうか、地域間格差の問題とか、福祉だとか、介護だとか、医療だとか、教育の、どうしても地域間格差があるよというのと、あと、これ、国内情勢の中でも出てきているんですけども、圧倒的に長野県は高齢化率が高いという中で、これ、どう対策をしてやっていくのかという。あえてそういったことを書かないで、希望的なところだけこう集中してお書きになっていることに何か意図があるのか。それとも、これ、国内の中に包含されているんで、そこで認識をするのかということでお考えになっているのか。

それが1点と、あと国内も含めてというところで言うと、外国人の労働者の流入の加速ですね。もう東京なんかへ行くと、コンビニはほとんど外国人がいらっしゃる。極端な話ですけども、これはもうとめどがなく出てくる可能性があるんで、そういったことに対する対応も含めて、少し長野県の特長として、どう受け入れていくかっていうことも、あわせてお考えいただければありがたいなと、そういうことでございます。よろしく願います。

(濱田会長)

長野県でもコンビニへ行くと外国人の方が、私も夜とか行くと外国人の人がレジにいて、温めますかって言って、そのままというのがなかなか通じなくて、温めますかって言って、いいえって言わないと通じないことある。日本だとそのままってよく言うんですけど、それがどうもいかんなど最近、思っているところもあります。その辺含めて、いろいろあるのかなと思います。

ほか、いかがでございましょう、どうぞ、野原さん。

(野原委員)

ほとんど、ある程度網羅されているわけですけども、5ページのところに、いわゆる長野県を取り巻く状況のところでもいいのか、それとも世界の規模の動きの中でいいのか、インバウンドというのが、最近、政府も目標を掲げて積極的に取り入れているというようなことに対して、そのインバウンドに対して長野県がどう取り組むかということも、やっぱり一つの課題になると思うんですね。その場合には、いろいろなそういう受け入れのた

めのいろいろな施策等も出てまいりますので、やはり国が掲げているそのインバウンド政策というようなものを、一緒にあわせてここに記述していただいたほうがいいかなという、そんな感じをしておりますので、よろしく願いいたします。

(濱田会長)

ありがとうございます。インバウンド、かなり重要な点かというふうに思います。今、どこへ行っても外国の方が、結構、来られているというのが長野県です。今後、どういうふうにするか、どの県も、インバウンドを取り込もうというふうにしておりますので、重要な点かなと思います。ほか、いかがでございましょうか。

(山浦委員)

4ページの低成長経済の長期化っていうのがあるんですが、どういう意味で書いているのか、よくわからないけれども、この下に書いてあるコメントが、低成長だから高度成長にするっていう気はなくて、もう経済成長はあきらめたよと、あきらめて違うものをやろうというムードなんだけど。これは、、書いた人はどういう意図なんですか。こういうふうにするということですか。

(伊藤総合政策課長)

決して産業政策をないがしろにするという意図はございません。当然、そういったものは基本としつつ、少し、ちょっと新しめのことを書かせていただきました。今までもいただきました、例えばインバウンドですとか、外国人の関係というのも、ここの世界の結びつきのところ、当然、書いていきます。実際こう言葉だけでこういうふうの世界と国内っていうふうに分けちゃうのもどうか。実際、まとめていくときには、ある程度、長野県の現状、データも踏まえた上でお示ししていくこととなりますが、今は、考え方の部分ということであって、実際、お示しするときには、世界と国内と完全に分断するわけには、多分、いかないと思いますので、そこは工夫させていただきたいと思います。

(濱田会長)

世界の中の日本という、結びつきが強くなればなるほど、ますますそうなっていくと思いますので、そのあたり、今後、まとめるときに書き方を工夫しなきゃいけない点がありますね。ほか、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

(藤原委員)

長野県を取り巻く状況ですが、世界規模の動きという中で、世界の人口が増加傾向で日本が減少傾向という、相対的な状況が出ているわけでありまして。その中で、特に1次産業で言えば、TPP等が、大分方向が変わっておりまして、アメリカ離脱後の状況がどうかというのもしっかり確認、状況把握しなければいけないわけでありまして。FTAとか、いろいろのまた方法論が出てくるかと思いますが、山浦委員の意見で出ているように、やはりJETROやいろいろと連携をして、農産物の輸出機能等を持った組織をつくったかどうかということでありまして。確か、食料需要の変化が出てきまして、国内需要が減少傾向

になってくると、どうしても海外戦略を考えていかなければいけないわけであります。そうなったときに、やはり長野県の特性をしっかり生かしていくような、圏域特性をしっかりと出すような1次産業を育てていかなければいけないということかと思えます。

海外戦略とあわせて、県内の生産種目みたいなものも、しっかり見ていったほうがいいんじゃないでしょうか。今までは、国内を中心にして、消費動向等を見ながら品目を拡大していったわけであります。今後は、国外もある程度視野に入れた栽培品目等の選定も必要になってくるのではないかと思いますので、その辺の位置づけもはっきりやっただけであればと思います。

(濱田会長)

確かにいろいろな形で国外に出ていくというが出ていくには、それなりのノウハウとかいろいろ必要だと思いますので、その辺は戦略を練って進めていかなければいけない点かというふうに思います。

ほか、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。ありましたら、次の論点に行ったときに、途中で、またここに戻っていただいても、いろいろ議論しながら、長野県の特長がそこで出てきたらその意見をいただいても結構でございます。

今、幾つかいただきました意見につきましては、事務局のほうで検討させていただいて、またまとめ方、さっきも世界と日本と分けてっていうのがいいのか、それとも一緒にという話も出ましたので、またその辺も考慮しながらまとめさせていただきたいと思えます。

また後で、これに関してご意見ございましたら、お願いしたいというふうに思っております。

それでは、次の論点に入らせていただきたいと思いますので、事務局のほうから説明をお願いいたします。

(伊藤総合政策課長)

8ページをお願いいたします。論点2、「重点政策の方向性」についてということで、これまで3回、審議会でご議論いただきました。それから、参考資料の1として、第3回の審議会以降、山浦委員からご提案をいただきまして、ありがとうございました。今日、詳細には紹介いたしませんけれども、こういったものも参考にさせていただきたいと思えます。参考資料の2で、今後、10年、20年後、これからの長野県ということで簡単な年表をお示ししています。

例えば10年後、2027年には、もうリニアが開業する。まだ申請中ではありますがけれども、本国体も開かれるというような、ある程度長期的な具体的なものもあります。その下にも、いろいろな国内外の動きを掲げてあります。こんなものも見据えながら、今後、重点的に取り組む政策の方向性のコンセプトを私ども総合政策課でたたき台として整理したものが以降のものです。

これにつきまして、これまでもご議論いただきましたように、単にこれを、何とか県というラベルをはがしちゃうと長野県らしくなくなってしまうような感じもありますので、長野県として、その特色・独自性を出せるものにするということ。

それから、総合計画ですので、ある程度総合的なというか、横串のものを、政策として

掲げていかなきゃいけないと思います。

総花的ではないようなものとするために、これからご説明します、その方向性について、ご意見いただくとともに、それを実現するために具体的な政策例を掲げていますが、その具体的な取組について、何かいいアイデアがないかということで、ご意見をいただければと思います。

9ページをお願いいたします。大きく5つの柱を掲げさせていただきました。その1つ目が産業の関係、それから世界との関係です。言ってみればキーコンセプトで言えばイノベーションですとか、グローバルとかっていうことになると思いますが、産業の生産性向上、世界とのつながりということで、それが一定の方向性だと思います。それに掲げる政策例として、ここにありますように、新産業の創出ですとか、食に着目した施策展開、それから観光地域づくりですとか、人材とか、研究開発型の企業の誘致、それから、先ほど安藤委員からもお話がありましたように、成長著しいアジア圏などとの経済連携というようなものを掲げております。

10ページをお願いいたします。2つ目の柱といたしまして、新たなライフスタイルの実現ということで、活気のある暮らしというようなコンセプトになるのでしょうか。想定される政策例として、「スマート」とか「クリエイティブ」なまちやむらづくりということです。先ほど会長さんからも、ソサエティー5.0という話がありましたけれども、そんなようなものも参考にしつつ、まちづくりをしていければと考えております。

それから、地域とか、人とか、経済のつながりを広げる高速交通網とか、高速情報通信ネットワークを充実していく。それから移住施策ですとか、文化芸術、スポーツ、こういったものを、生活や地域活力を向上させるものとしてどうしていくか。それから未来のために、環境ですとか、社会ですとか、経済に配慮する、いわゆる賢い消費行動を促進できたらと思っております。これはSDGsなどを想定しております。

11ページをお願いいたします。柱の3つ目、誰にでも居場所と出番があるというものです。キーコンセプトとすれば、全ての人の活躍とか、ユニバーサルですとか、ダイバーシティとか、そういったものだと思います。想定される政策例として、全ての子どもが大切にされ、その未来を応援していこうということ。女性の輝きを応援する。それから、誰もが働きたい人が働ける、地域で活躍できる社会ということで、人生100年時代を見据えた働き方の実現。それから、多様性を強みにできないかということで、個人の違いや個性を尊重する、自立・社会参加を応援するといったものを掲げております。

12ページをお願いいたします。4つ目です。人と自然の「いのち」を守るということで、安全ですとか、安心ですとか、健康ですとか、環境ですとか、そういったものコンセプトです。政策例といたしましては、まず安全・安心のための災害への対応力強化。それから命を失わないこと、生きることへの包括的支援。豊かな人生を支えるその健康づくりのために、今、信州ACE（エース）プロジェクトを進めていますけれども、なかなかうまくいかないということで、その新展開を図っていこうということ。それから脱炭素社会の構築ということで、地球に貢献するための省エネですとか再生可能エネルギーの促進。それから最後ですけれども、木と森の文化の創造ということで、県土の8割を占める森林資源の活用を始め、木と森に由来する技術ですとか、文化ですとか、知恵を継続させていく、そういった取組ができないかということで掲げております。

13ページをお願いいたします。5つ目、学びの県ということで、これまでも産業と教育は大変重要な柱になるということでご議論いただいたものです。

教育県ではなく学びの県ということで、1つ目として、生きる力を身につけ、新しい価値を生み出せる人材を育てるといような教育の充実。それから、最近、小林委員の学校もそうですけど、いろいろなところで、さまざまな特徴ある学校の設立の動きがありますが、こういった多様な学びの場づくり。それと、地域の発展に貢献する学校づくりというのは、県内大学との連携ですとか、県立高校のあり方などを想定したものです。それから生涯学び続けられる、または学び直しができる、そういった環境づくりをしていく必要があるんじゃないかということで掲げております。

それから、5つの柱と言いましたけど、最後にもう一点。冒頭、部長も申し上げましたとおり、今回の計画は、いわゆる地域編というものをこれまで以上に充実していく予定としておりまして、地域振興局ごとに策定を進めているところですけども、地域の個性が輝くということやってまいりたいと思います。

参考資料3をごらんいただきますと、地域戦略会議を10の振興局単位でやっているところです。先ほど言いましたように、既に7つ済んでおりまして、残り3局を来月開催予定です。これまでいろいろな意見をいただいているところではありますが、例えば2ページをごらんいただきますと、総論としてちゃんと役割分担を明確にしたほうがいいんじゃないかと、何でもかんでも県ができるわけではないということ。

それから産業のところ、ポツの5つ目にありますが、やはり多く出たのが、子どもや若者が地元の企業をなかなか知らないんじゃないかということで、知る機会を確保したほうがいいんじゃないかということ。

3ページに行きますと、地域づくりです。こういった感じで、その地元の情報を発信することが大事である。同じような趣旨になります。

それから4ページですけど、教育・子育て、これも、一旦出た若者だけじゃなくて、地元にいる子ども・若者たちが、地域に残り、また帰ってくるような教育を推進したほうがいいんじゃないかというようなご意見をいただきました。

それから、もう一つ参考資料4です。前回以降、私どもが、いろいろな場面を通じて県民の皆様と意見交換をしているものを、参考資料の4として掲げております。ちょっとご紹介いたしますと、1つ目と2つ目、「ジモト未来会議」と「知事とのタウンミーティング（東信）」。この2つは、知事と若者との意見交換で、特にその「ジモト未来会議」というのは、県出身の、県内の高校を出て東京近郊の大学に行っている現役の大学生20数名と、先ごろ、知事と東京で意見交換をしました。一旦外に出て、あなたにとって魅力的な地元信州とは何なのかというような感じで意見交換してもらいました。

ここにもありますように、例えば、産業・雇用のところで、首都圏で就活していると、東京の企業の情報というのは自分で何もしなくても得られるんだけど、なかなか県内企業の情報というのは手に入らないというような意見をいただきました。

一方で、ここにはありませんが、東京に出てきて、改めてふるさとの魅力を再認識したというような意見もありましたので、こういったものをどうつなげていくかというのが課題だと思います。

それから2つ目に、「知事とのタウンミーティング（東信）」とありますけど、これは上

田市で先ごろやりました。一般県民とありますが、18歳から39歳の、20数名の若者と知事が意見交換をしました。このテーマは、「知事と語ろう、10年、20年後の長野県」ということだったんですけども、ここでは、先ほどのジモト未来会議とは若干違って、むしろ、身近な就職ですとか、自分の健康ですとか、将来の親の介護というような、将来の不安というものが、意見として多く出されて、こういったものをどう安心につなげていくかというようなことが課題だと思います。

今後、知事と若者との意見交換につきましては、例えば、今日、ニュースにもありましたけれども、佐久大学から、健康に関する政策提言をいただきました。信州大学を始め、県内大学、ゼミとか、研究室単位で、そういったもののコラボレーションもやっていきたいと思っておりますので、ご紹介いたしました。ちょっと長くなりましたけど、「重点政策の方向性」について、説明させていただきました。

(濱田会長)

どうもありがとうございました。ただいま説明のありました論点2の「重点政策の方向性」について、議論をさせていただきたいというふうに思っております。先ほどありましたように、資料の9ページから13ページに記載されている1から6まで、6つの重点政策の方向性というのが書いてございまして、それぞれに「想定される政策(例)」というのがありました。それでこれについて、追加・修正すべき点はあるかというのを、ご意見をいただくとともに、「想定される政策(例)」を実現するための目玉となる具体的な取組のアイデアをご提案いただきたいというふうに思っております。

それでこの6つの「重点政策の方向性」につきましては、フレーズは後からいろいろといいように変えていきますので、フレーズの良し悪しではなくて、新計画の重点政策を組み立てる際の目線として足りないものはないか。また、「想定される政策(例)」につきましては、この政策分野から新しい計画の目玉となる取組がつかれるかといった観点でご意見をいただきたいというふうに思っております。

また、具体的な取組のアイデアを挙げていただいた上で、「重点政策の方向性」などについて、ご意見をいただいても結構でございますので、今、言いましたもの、1から6の柱の政策例も含めて、ご意見をいただければというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。近藤委員から、では、先ほどの続きですので、お願いできますか。

(近藤委員)

先ほどの前段で発言をいたしませんでしたので、ちょっと現状認識を一言申し上げて、その上で重点政策のほうに移りたいと思います。全体を現状認識として拝読して、事実関係としては全く問題ないと思います。しいて言えば、世界が大きく変わっており、日本はその中で非常に厳しい状況にあるというトーンの中で、今の世界の文明がどちらの方向に向いていくかを考えるときに、日本の持っている潜在力が生かせるチャンスが到来しているんじゃないか。西洋の近代合理主義で400年ほどずっと世界が振り回されてきたけれども、それが相当、人間の文明を発達させたけれども、今やそれがいろいろなところで壁にぶち当たっている。どういうふうに乗っ越えていけばいいのか、暗中模索であるという中で、日本が大事にしてきた伝統的な精神、生活観、文化、生活スタイル、そういったものの価

値が実はじわじわと上がっている。

ある意味では日本にとってチャンスなんだというふうに、ポジティブな発想を、我々、もっと自信を持つべきなので、そういったことを何らかの形で触れていただけると、次の、何をやるかという方向性にもつながるので、必要なというのが第1点です。現状認識に対するコメントです。

それから、では、今後、何をやるかですけれども、例えば9ページ、産業の生産性向上。何といても社会を動かしていくエンジンは、企業であり、産業です。したがって、ここにある新産業創出ということは必要です。ここで、ライフスタイルのところにあります、今申し上げた文化とか、伝統的な精神性、そういったものを、新しい産業をつくる上で、あるいは生産性向上をする上で、あるいは世界とつながっていく上で、そういう日本の持っているもの、匠の精神なんかも含めて、それがもっと生かされる余地が出てきたんではないか、それをもっとフルに潜在力を発揮できるように誘導していくといった環境づくりをしたほうがいいんじゃないかというふうに思っております、その点を申し上げます。

それから、10ページ、新たなライフスタイルのところ。たまたま、今、大町市でやっております国際芸術祭。北川フラムさんが始められましたが、大変いい、好調な滑り出しだったと思います。そこでは、普通の方が見ると、とんでもないような現代アートがドーンと畑にあったりするんですね。

よく聞いてみると、例えば竹を曲げるのに、地元の方が、みんなで集まって一緒に協力をしたということ。初めはみんな引いていたのが、ロシア人の方だったか、そのアーティストが苦勞しているのを見て、地元の方がみんなで助けてあげたとか。そういうことで、特に長野県民性は、どちらかというと保守性が高いと思いますが、一見とんでもない、そういう異質なものを受け入れる懐の深さというものが、もっと日本人全体でほしいし、長野県民も例外ではない。それは、そういう能力がないのではなくて、場が与えられれば、今の例のように異質で怖かったものに入って、やろうとする。今年始めたけど、また3年後、もう一回やろうよという人が増えているということです。やっぱり異質なものを許容する力をいろいろな形で取り込んで、教育であれ、社会であれ、仕事場であれ、何であれ、そういう雰囲気をつくっていくことが、潜在力を生かし、世界からものを吸収する上で、とても大事ではないかと思えます。

それから、最後に、13ページになるのでしょうか。今の、学びの重点的な方向性ですが、私がよく招かれるこの種のラウンドテーブルとか審議会で、必ず出てくるのがグローバル人材なんです、ここには確か一言もないですよ。私、長野県の上田高校と長野高校のスーパーグローバルハイスクールにかかわっておりますけれども、ただグローバルって書けばいいっていうものじゃなくて、一番最初に書いてあるように、海外とつながっているんだという認識があるのであれば、もっと長野県人が外に出て行って、外を見て、新しいものを吸収して帰ってくるという姿勢がもっとほしい。

それから、地域性の話が出ましたけれども、私も長野県に携わって3年過ぎたぐらいです。やはりいい意味の地域性はたくさんあるんですが、それが全然つながっておらず、点だけになっていて、それが長野県の力、信州の力になっていないということを、非常に歯がゆく感じております。ですから、地域の特性とか、地域の個性が輝く、それは大いに結構なんですけれども、それが集まってつながって一緒に何かやるという、そういう方向性

は極めて大事だし、それはやっぱり行政が相当努力してやらないといけないんじゃないかということを経後に申し上げます。

(濱田会長)

ありがとうございます。最後おっしゃった、つながりを持つ、県の役割というのがそこに私はあるんじゃないか、と思っております。

地域地域の特徴というのは、市町村がありますので、そこでできるんですけど、どこでもそれができるわけではないですので、できるものなら、やっぱり県がうまくつなげていく。県というのは、ある意味、ちょっと言い方が悪いですが、中二階的な立場にあたりもしますので、そのところの役割って、うまくできる点なのかなというふうに、私自身も思っているところです。

では先ほど発言されなかった人を中心に、まず発言していただいて、それで先ほど発言された方に戻りたいと思いますので、では園原委員、いかがでございましょうか。

(園原委員)

9ページにあります「重点政策の方向性」の中に、信州の食の満足度向上って書かれています。この満足度の中には、先ほど現状認識の中にもありましたように、トップレベルの健康長寿県という意識も入っていますでしょうし、それからACEプロジェクトがなかなかうまく進まないというお話もありましたので、その辺を認識された言葉なのかなって思っています。すごくこれって、食としてしまうと範囲が広くて、何かもう少し表現の仕方考えたほうがいいかなって私は感じました。

健康とか、そういう意識も入っているんだろうけれども、食とすると、地域産業の、先ほどお話があったそれぞれの地産地消の意識も入っていますし、それからワインバレーとか、それぞれの農業の特色を生かすとか、原産地呼称とか、そういうところも入っていますでしょうし。「食」ってしてしまうとすごく広くなり過ぎちゃうんじゃないかなっていうふうに思っております。満足度向上ってやるならば、もう少し的確な、健康と何とかがつなげたほうが、インパクトがあるんじゃないかなと思いました。

(濱田会長)

わかりました。ありがとうございます。それでは中畷委員、いかがでございましょうか。

(中畷委員)

長野県の場合は、住みたい県とかっていうアンケートをとったりすると、必ず名前が上位に挙がってくると思うんですけども、それはやっぱり長野県が自然豊かだということ、居住地域と自然との距離が近くて、自然と親しみながら生活できるということが魅力になっているからなんだというふうに思います。

ただ、最近、特に私たちの身近なところにある里山などの山林などについては、相続などで代々受け継がれていくうちに、今、相続された相続人の方がもう現地がどこかわからなくなっちゃっているとか、あとは、そもそももう相続される方がいなくて管理がもう行き届かなくなっているというような、ちょっと放棄されているような山林、里山とか、

そういうものが結構増えているように感じております。

そのため、全国的には空き家対策なんていうのが問題になっているようですが、長野県の場合には、空き家対策ならぬ空き山林って言うんですかね、そういうふうに入の手が入らなくってというか、管理ができていないような山林なんかも、結構、里山を中心に増えているというふうに思いますので、その辺の対策についても、力を入れていく必要があるのかなというふうに思ったりしています。

長野県はもともと木と森の文化というのがあって、このことが人々をひきつけるということもあるし、また観光資源にもなっていると思いますので、この点については、ぜひ、長野県の強みということで、重点政策の柱の一つにして、いろいろな政策を進めていただければ、長野県らしさが出るんじゃないかなというふうに思ったりしています。

(濱田会長)

ありがとうございます。いろいろな意味で、今、獣害の部分もそれと同じようなことが起こっているのではないかと思いますので、その辺も重要な点じゃないかと思います。それでは中條委員、いかがでございましょうか。

(中條委員)

現状認識の長野県を取り巻く状況のところ、園原委員もおっしゃられたんですけども、人生100年時代へっていうところに、暮らし、学び、働きの変革はあるんですけども、やっぱり健康で100年を迎えたいなというふうに思いますので、健康でという部分のところを、食と運動というようなことも加えていただければ、と思います。健康寿命ってここに入れなくてもいいかなと思うんですけども、やっぱり健康で100年を迎えたいなっていう思いは入れていただければいいかなというふうに思います。

それに続けまして、方向性のところで、12ページのところで、ACEプロジェクトの新展開ということで、今、ACEプロジェクトができたけれども、なかなか前に進んでいないようなところがある。私のところでは、1年前に同じようなことをやりました。ぜひ皆さんに自覚していただきたいということで、カレンダーに、毎日、食事と、それから運動を書いてもらって、それで3か月ぐらい続けてもらいながら、それができたらまた半年ぐらい続ける。

やっぱり書くということはデータができますので、それなりに自覚できますし、3か月過ぎましたら、ちょっと見せてもらって、採点をします。そうすると、その先がまた、効果があらわれてくると自分の健康管理ができるようになりました。ちょっと大変ですけども、私たちのようなちゃんとしたカレンダーでなくてもいいですので、メモでも、それからノートでも、どこでもいいですので、今日、何を食べたか、それからどのくらい運動したかというのをちょっとメモっていけば、どうでしょうか。

あと、誰にでも居場所と出番があるというところで、公民館とか、歴史館とか、図書館を利用してはどうかという点。この居場所のところ、それらが、皆さんが集いながら話し合って改善できるような形に持っていければ、よろしいかなというふうな想定をしています。

もう一つなんですけれども、今いただきました地域戦略会議資料、参考資料3のところ

に、女性が活躍し、楽しく暮らせる地域には人が集まるというのがありまして、この前いただきました参考資料4のところにも、地域づくりのところ、知事と伊那谷の経済界の皆さんの意見交換のところ、同じような、女性が暮らしやすい社会になれば、自然に人口も増えるのではないのでしょうかという文言がありました。これは、両方とも同じ会議の中で出てきたことなのではないでしょうか。そのときの会議の内容が、女性が暮らしやすいとか、活躍とかいうことがどんなことであったか、もうちょっと教えていただければ、と思います。伊那谷の経済界の皆さんがそうおっしゃってくださったというのは、私たちの感覚で言うと興味がありまして、それがわかれば、これからどうしたらいいかなということがわかってくると思うので。

(伊藤総合政策課長)

すみません、発言の詳細はちょっとよくわからないんですけども、地域戦略会議は、このエリアの市町村長と知事とのお話し合いですので、ここの女性の地域づくりの視点は、要は市町村長の視点ですね。もう一個は経済界の人ですから、企業経営者の方からそういう発言が出たということで、会議は違っています。この真意までは、すみません。

(中條委員)

それで11ページの女性の輝きを応援というこの文言のところを、どんなお気持ちで何を応援すればいいのかっていうのを、ちょっとお聞かせいただければ。

(伊藤総合政策課長)

例えば男女共同参画だとか、女性の社会参加っていう定番の言葉ではなく、まず、女性は全ての面で、いろいろなところで活躍できるんだということ、そういう社会づくりをしていこうということです。単なる働き方改革だけにとどまらず、やっていければ、ということ。いろいろな意味が含まれています。

(濱田会長)

よろしいでしょうか。いろいろな形でいろいろなご意見が出て、この女性のことについては、今、市町村とかは、人口の増減に関しては、男女でどうなっているかって詳しく分析して、その理由とかを求めているみたいですので、そのあたりのところをうまく分析しながら、増えているところもあると聞いております。その辺をぜひ参考にしながらやっていかなきゃいけない部分もあるのかなというふうには思っているところでございます。それでは畠山委員、お願いできますでしょうか。

(畠山委員)

今のお話ですが、介護についてお話しすれば、介護現場で若い働く女性たちが、仕事を求めて東京など首都圏に出ていってしまうと、長野県での出産数が減り子どもが増えないという状況になるということが前から言われていましたので、女性が暮らしやすく働きやすい、子育てしやすい環境を整備することが、必然的に人口が増えることになるのだと理解して

いたので、この部分は読ませていただきました。

この3ページの「技術革新の急速な進展」というところですが、介護保険が平成30年に改正されますが、その際介護ロボットを積極的に導入しているところ、ICTを活用しているところには加算をというような動きがある中で、3ページのこの箇所に「人間固有の能力が重要」ということを書いてくださっていることに、私としては長野県らしさの一つのあらわれを感じ、とてもうれしいと感じました。最近、新聞紙面などで介護ロボットのことがたくさん取り上げられ県民の関心と呼んでいることに多少違和感を覚えています。私の周辺の人たちも、介護ロボットは必要だということを強くおっしゃるのですがそれを聞いていて、私たちの人間力が介護ロボットに頼らざるを得ない状況になってしまったのかと、少し悲しく思っていました。でもここに書いてくださったので、すごくよかったと思います。将来的にはロボットによって介護されるのかもしれませんが、近々5年の間は、やはり人間力が必要だろうと考えているので、ここは重要ではないかと思いました。

それと、最近、一番思うことは、若い世代が、長野県の未来像をどんなふうを描いているのだろうかということです。例えば私たちが子どものときは、ロボットが日常的に身近な存在となっているとか、高速道路がはり巡らされているまちのありようを絵に描いた覚えがあるのですが、これからの社会がどんな風になっていると思うのかと今の若者たちに聞くと、想像したこともないと言うのです。しかし、私たちが未来像として描いた夢のような社会が今現実の世界になっていることを考えると、未来を担う若者や子供たちが未来の社会を思い描くことは必要なのではないかと思うのです。現実的で未来を描けない若者たちや子どもたちがいるというのは、大きな問題なのではないだろうかと感じています。これはどこで間違っただろうか、なぜそうってしまったのだろうかと思います。

ぜひ、長野県は、子どもたちが長野県の未来像を描けるような社会を目指すために、子どもたちからそんな意見を聞く、あるいは学校教育の中で少しそういうものも取り上げていただければ、明るい未来が見えてくるのではないかと思います。ぜひ、どこかにそのことを加えていただければありがたいと思います。

あとは、観光産業についてです。長野県は、温泉地が全国の中で2位だそうです。それから宿泊施設も全国の中で2番目に多いということです。その強みをもっと活用し、ラグビーワールドカップや東京オリンピックを一つの目標においてテコ入れしていけば、観光産業が今以上に活性化するのではないかと思います。以上です。

(濱田会長)

ありがとうございます。いつ未来を想像しなくなったか、私もわからないんですけど、昔は漫画であったり、いろいろなものが未来を映している。それで我々が子どものころにあった大阪の万博というのは、まさに未来を映していた。そのころに携帯電話が将来は出ますよって言っていたのが、今、現実のものになっているので、いろいろなものがあるのかなって感じは確かにしますよね。

だから、今、信州学っていうのを長野県の場合もやるようになったんですけど、もう一個は、信州未来学的なものも、多分、必要なかっていうふうには、ちょっと私自身は感じているところです。

それではもとにちょっと戻らせていただきまして、安藤委員のほうからお願いできます

でしょうか。

(安藤委員)

それでは「重点政策の方向性」について、感じるところを、できるだけ具体的な施策に結びつけるという観点から提案をしたいと思います。この重点政策として1から6まで、特に1から5までを共通していることは何かというと、一つは、現状のところに出てきましたけど、やはりテクノロジーの急速な発展があると思います。これが全ての産業に影響を与えてきているということ。もう一つは、やっぱり人。全てが人に関係することなんだと。ですから結局は、人材の育成であり、活用ですので、結局、人材をどう育てるかという教育の問題になるのかなど。前回の議論で、産業と教育ということで議論したのですが、同じようなところに戻るのかもしれない。

テクノロジーについて言うならば、イギリスの「エコノミスト」という雑誌が、毎年、世界の予測を出していて、最近、「2050年に対する技術」とか、「2050年の世界」とか、そういう出版物を出しています。その編集長が、最近、言っているところによると、要するに第4次産業革命のインパクトというのは、もう、今までの産業革命とは違って、あらゆるところに影響すると。そういう意味では、全ての分野の産業は、これからはテクノロジー産業である、と言っているんですね。

幾つか、そのテクノロジーのことについて言わせていただきますと、特に生産性の向上というところがまず一番に上がっていますけれども、その生産性の向上については、日本は、少なくともものづくりにおいては、世界に冠たる生産性の高さなんですね。

一方で、日本の生産性がG7の中では最低であるとか、それから世界では20番目前後であるとか言われているのは、ひとえにサービス産業の生産性が非常に低いからです。その中でも特に低いのは、政府とか、それから地方公共団体とか、そういうところが一番低い。

これからは、1次産業もあるんですけども、特にサービス分野に、どれだけテクノロジーをうまく使うことによって、生産性を上げていくことが、一番大事になってくるんじゃないでしょうか。金融ですとフィンテックなんかもそうですし、農業でも、全てビッグデータで取り込んで生産性を上げているところが、大企業化して勝ってしまうみたいな、そういう流れになってきているわけです。

そう考えると、私は山浦さんのペーパーって、非常にいいことが書いてあるなと思いました。長野はいろいろな特徴のある産業があるし、技術力のあるメーカーも沢山あります。南信においては、例えば多摩川精機さんが宇宙航空産業で非常に強くなるとか、それから中信は、例えばメディカルとか、それからロボティクスとかですね。それから北信とかは、むしろソフト産業がいいんではあるまいかとかいうような提案がありました。私は全くそのとおりだと思います。

やはり日本の産業の中でこれから大事になってきているのに、今、日本はソフト産業的なところが非常に弱い。せつかくの強い、精密産業とか、メディカルとか、宇宙航空産業を伸ばしていこうとしたら、必ずサービスとか、ソフトとかと連携して新しいビジネスモデルをつくっていかないといけない。ハードだけで競争しても利益は益々苦しくなり、結局は研究開発のコストも回収できなくなってしまって、最後は脱落してしまうというのが、今までの日本のものづくりの現状だったと思うんですね。

そういう点では、ソフト産業をどう育てるか。これは、先ほど触れましたけれども、アジアとのつながりが非常に大きいと思っています。アメリカのシリコンバレーが何であんなに強くなったかという、全く時間帯の違うインドと一体となって、バンガロールあたりで何万人も人を雇っている。だからアメリカが働いているときにインドは寝ていて、インドが仕事しているときにアメリカが寝ていて、両方あわせて、ものすごい高生産性が実現してしまった。

そう考えると、具体的に、ではどんなところと組めばいいか考えると、私は観光とか、サービスとかになると、オーストラリアっていう国は非常にユニークだし、あそこは1次産業に向いている。それからもう一つ、ソフト産業ですと、アジアの一員であるならば、バングラデシュみたいなのところも考えられる。知的レベルというか、数字に対する強みとか、ソフトの強みがインドと対等以上でありながら、コストの面においては10分の1とか5分の1です。戦略的にどこと組むかによって、日本の生産性をどんどん上げるということが、可能だと思うんですね。

宮崎県の話なんですけれども、IT産業がないとなったときに、そういう国の人をどんどん呼んで来て、そこで人材を養成する。そうすると、九州のIT産業が、全部宮崎へ来るというのが戦略なんですね。これから20年、30年で、新しい産業を育てるとすると、ハードを育てても、それだけでは付加価値が伴わない。そんな中で新しいビジネスモデルをつくるとなると、やはりITであり、それからソフト、アプリ、サービスみたいなものをどう組み合わせることによって強くするかということ、具体的に考えるべきではないかというのが私の提案です。

あとテクノロジーで言うならば、もう一つはエネルギーですね。この中で脱炭素社会っていうのがありますけれども、日本はGDPの何倍も借金している訳ですが、社会保障費とエネルギーの、この2つがその原因ですから、この2つを解決しなくてははいけない。

脱炭素社会を目指すのであれば、もっともっと、自然エネルギー、再生エネルギーを使っていかなければいけない。長野県は水力も強いし、何も原子力に頼る必要はないわけですから、「自然エネルギー100%宣言」みたいなことを思い切ってバツと言ってしまっただろうかと思えます。言ってしまっただと、あとは10年、20年かけてもいいから、それをどう実現するのかということを考える。そこにテクノロジーが集まってきますし、それから今のスマートメーターを使えば、今ですらエネルギーは70%が自給自足できるわけです。ですから、それを100%にするんだとしたら、ソフトとか、ハードとか、長野県の持っている知的レベルと産業を、どんどんその為に使うというふうなことをやっていただきたいと思っています。

あと、人のことなんですけれども。それについて、私はあえて幾つか申し上げますと、3のところに書いてある、誰でも居場所と出番があるというところ。出番があるとなると、シニアも、若者も、女性もとなるんですけれども、私はやっぱりもうちょっと明快に、この5か年ほどを中心にするか決めるべきだと思います。そうなってくると、順序で言うならば、一番はやっぱり女性だと思うんです。それは人口問題から何か、女性がどう定住するかによって決まってくる。女性が輝くってありましたけれども、女性が能力に比例して、例えば非正規が多いだとか、付加価値が少ないだとか、そういうようなことがものすごくハンディキャップになっています。ただ、欧米はそういうことを克服して、社会が子

育てを援助するとか、いろいろなことをやっているわけです。

そういう意味では、ダイバーシティに対する本気度みたいなものが、どうも感じられない。一応並べて、ちょっと輝くといったように書いてあっても、簡単に読み過ぎてしまうというのではあまりにも情けない。女性のキャリア全体を考えて、本気になってダイバーシティを長野県は打ち出しているぞ、女性が輝く世界は長野だ、そういうふうなものを強く打ち出したいと思っています。

これは石川県の例なんですけど、コマツの元の社長が言っていたんですけども、コマツは、もともと石川県の小松市から出た企業ですが、本社は、東京にあったわけです。ところが、10年ぐらい前から石川県の小松に、半分以上、本社を移した。それで、今、何が起きているかっていうと、やっぱり女性の出生率が、東京に住んでいる人と比べてみると、東京は0.9しかないのに、石川県に移った人たちはもう1.9人の子どもが生まれている。たった10年たたない間に、そのようなことが実現している。

それから結婚の比率も、石川県のほうが80%以上で、東京は50%未満とかですね。何かそういう地方のよさと、それから、女性の輝く社会ということで、女性が十分に活躍できる社会というところから進めたらどうでしょうか。

もう一つは若者です。今、若者の反乱ということが言われています。全世界、G7なんか見ましても、日本はあまりにもシニア層に対する関心が高く、それに対して若者に対する待遇があまりにも冷たいというのが、最近ではいろいろなところで言われています。子ども保険なんかも議論されておりますし、とにかく日本の若者たちが夢を持てる社会をどう実現するかというようなことは、非常に大切なことだと思います。

ある内閣府のデータによると、日本の若者っていうのは、世界で一番、国とか社会のために役立ちたいという思いは強いんです。平均すると55%ぐらいです。ほかのどの国を見ても、40%ぐらいか、40%切っているわけですよ。「ではあなたは社会を変えられると思いますか」という質問をすると、何と日本が一番低い。30%を切ってしまう。19%とかですね。ほかはみんな40%超えています。アメリカなんか特にすごくて50何%の若者が、自分が世界を変えるんだと言っているわけですよ。その格差が何で起こるかっていうと、自分に対して自信が持てないとか、彼らの才能が発揮できるチャンスとか、場をつくってあげることが必要です。そこは教育の問題で、例えば私共の県立大学なんかもそうですけど、次の世代の若者に対して、新しいテクノロジーの環境の中で、才能が発揮できて、ロボットに代替されない職につくことができるようにする。そっちのほうをもっと明確にする政策をどんどん打っていくのが大事なんではないかと思っています。

(濱田会長)

ありがとうございます。最初おっしゃったITの関係は、この間、私も講演を聞いたんですけど、長野県の企業はやっぱり遅れている、導入がかなり遅れているというふうには言われておりますので、やっぱりその辺、重要な点じゃないかなというふうに思っているところでございます。いろいろな意見、ありがとうございます。では春日委員、お願いいたします。

(春日委員)

私が、これを見させてもらって、一つちょっとよくわからなくなったのは、先ほど産業の生産性向上のところで園原委員さんが言っていました、信州の食の満足度向上っていうところなんですけれども、これのイメージからすると、やっぱり農畜産物など、料理したり、加工したり、要は食、消費のほうの感覚に見えちゃうんですね。

具体的なイメージがいろいろなものに広がり過ぎていて、食の満足度という消費の面も含めていろいろな視点が出てきちゃうんじゃないかと思います。食っていうことを、信州ブランドとして捉えていくように考えたらどうか。それを強みにしていくべきではないのかなと思います。

産業の生産向上っていう観点でいくと、もう信州はその農産物も非常に高度なブランド化したものがあるわけですけど、農畜産物や食品加工品なんかもブランド化を図っていくという、もっとそれを戦略として生かしていく必要があるし、それが農業や食料産業の振興につながっていくようなブランド化っていうふうにしていくようにしたほうがいいんじゃないかと。そういう点では、この満足度向上というだけでは少しイメージが湧かないんで、そこら辺を少し変えていただければありがたいかなと。

また、輸出を、国もどんどんどんどん進めろって言うてるし、長野県には常にすばらしいものがあるから、輸出に対応することも十分にできると思います。世界のつながりっていうところに入るのか、この中でどこに入れていくのかみたいなのが明確に見えていない。アジア圏との経済連携、そこでもないでしょうし、どこにそういうものが入っていくのかなというところも、やはり長野県としてもブランド化しながら、それを輸出をしていく、加工品も含めて輸出していくっていうようなところをやっていく必要があるだろうと。

それから、11ページの誰にでも居場所と出番があるというところで、やはり長野県の強みは、こういう地域、中山間地帯を含めたところのまとまりだということがありますので、やはりその助け合い、共助の部分っていうところが基盤にあると思います。安心した生活、女性の輝きを応援するっていうところも含めてですね、子育ても、地域でみんなで面倒を見るみたいな、そういう助け合い組織が、長野県の中には幾つもできてきているんですね。そういうものとやはり行政もタイアップしながら、地域住民との話し合いをやっていくみたいところをきちんと位置づけて、長野県の特長あるこの施策の中に入っていけば、安心して暮らせる社会がつけられるんじゃないかなと思います。以上です。

(濱田会長)

ありがとうございます。共助っていうのは確かにそうですね、長野県の一番強いところだと思います。では小林委員、どうぞ。

(小林委員)

13ページ目の学びの県について、ここで政策について3点申し上げたいのと、それから2点、事務局の方に質問させていただければと思います。

まず1点目なんですけど、先ほどの近藤委員のご指摘の点、まさにそうだと思っていて、やっぱりこの生き抜く力ってすごく大事な一方で、どこで生き抜いていくんだって考えたときに、この急速にグローバル化する社会を考えると、できれば「どこにいても」、生き抜くことというのはすごく大事なかなと思ったのが1点目です。

2点目に、そういう教育に切りかえていくときに、一番大事なのは先生だと思っただけでよいね。学校現場は、先生が変わらなければ、何が変わっても絶対変わらないと思うので。もし可能であれば、従来は県の重点政策とかに入っていない観点かも知れませんが、学校の教員という職業が、夢がある職業になるような環境づくりというのを掲げてもいいのではないのでしょうか。現在、「長野県のこれからの教育を考える有識者会議」のほうにも出させていただいていますが、教員研修の充実、あるいは多忙感の解消といった環境整備、抜本的な職場環境の改革というのが急務になっているかなというふうに思っていますので、ぜひご検討いただければと思います。

3点目が、先ほどどなたか、こども保険ということをおっしゃっていましたが、今回、これがもし実現すると、幼児教育にかなりの資金が投入されることになるかもしれないと思います。これを踏まえたときに、現在の長野県の幼児教育を見ると、保育園と幼稚園、また私立と公立がかなり分断されているという状況の中で、しかも県教委とも連携されていないという形で、幼児教育が非常に大事だと言われていながら、そこになかなか県としての教育方針が反映しにくい体制になっているのではないかと感じます。県庁内での役割分担を正確に理解しておらず外部の人間の見解ではありますが、ぜひそのあたりの一貫性を保てるにさせていただければ。それを3点目としてお願いできればと思いました。

次に2点、ご質問です。一つは、すみません、これ、我田引水みたいで嫌なんですけど、順番についてです。もともと、産業と教育は大事だということで、当初からお話していたと思いますが。学びが最後に来た理由が何かあれば、お伺いしたいということが一つ。すみません、何か背景に意図や意見があるわけではなく純粋な質問です。

2つ目が、学びの県の中の3ポツなんですけれども、「地域の発展に貢献する学校づくり」という文章で意図されているところをもう少しお伺いしたいなと思いました。教育のほうの有識者会議の中で、たまに出るのが、長野のよさを知ってもらおう、長野に残ってもらおうっていう意見です。気持ちはすごくよくわかるんですけども、9ページ目にある異文化連携による新産業の創出、イノベーション人材の育成、アジア圏との経済連携とかが行われてくれば、自然に人は回帰してくるし、人は残ると思うんですね。これは強制的に残すものではないと私は思っていて、既に十分に魅力のある産業の素地があるので、そちらをもっと、9ページにあるような形で強化していくことが肝要であり、教育が必ずしも県に貢献することを目標とする必要はない気がしています。教育は本来、生徒個々人の才能と可能性を最大限に花開かせることこそが目的であるはずなので。

(伊藤総合政策課長)

お答えいたします。順番ってすごく難しいんですけども、こう考えていただければと思います。6番目の地域の個性が輝くはちょっと別とした場合に、やっぱり5つの点ですね。そうすると、一番最初に産業が出て、最後に学びになって、要は、これで全体を包むという、そんな形ですので、別に5番目という、そういう意味ではありません。飛んでしまえますけど、例えば16ページが概念図で、これも順番がどうかありますが、ここだと学びの順番が上に来ています。あらわし方は、今後、工夫いたします。特に5番目、末端っていう意味じゃなくて、むしろ大事なものが両サイドでありますということです。

それと、今の地域の発展に貢献する学校づくり。私どもも、例えばほかのものも、どち

らかというと、もしかしたら行政の上から目線的な言葉も散見される部分もあると思って、そこは反省しなきゃいけないんですけども、やはり産業にしても、何にしても、やはり教育っていうのはすごく大事です。安藤委員がおっしゃったように、県立大学もこの地域とともにというふうにおっしゃっています。イノベーションを起こすという意味でも、学校の地域の発展に果たす役割って非常に大きいだろうと思います。義務教育も、コミュニティスクールがありますし、そういった、産業だけではなく、地域づくりとか、そういった面も含めて、いろいろな場面で学校というのを活用していただかなきゃいけない部分も出てくるかと思っています。

それと信州学というのもありますので、やはり地域とともに学校があるのではないかとということで、ここに掲げさせていただきました。これは一つのたたき台ですので、そういうこともまた参考にさせていただきながら、検討していきたいと思っています。

(小林委員)

ありがとうございます。

(濱田会長)

それでは、近藤委員が16時半で退席予定なので、先に、もし論点3で何か意見があったらおっしゃっていただけますでしょうか。

(近藤委員)

ご説明のないままに、この数行だけに反応というのはちょっと難しいんですが、言いたいことはよくわかります。一人一人が安心して、明日が来る、明日は怖くない、それどころか明日が楽しみな人生を送れるようにしたいということだろうと思います。基本的な考え方に、特に異論ありません。

「人生を楽しむ」という言葉は、一定の年代以上の人は、あまりいい印象を受けないかもしれませんが、本当に一人一人が楽しめる、生きがいがある、何かたしなみを持って、それが好きで好きでしょうがない、また明日これをやろうと思う、そういうポジティブな、明日を楽しみにするような生活を一人一人ができれば、まさに信州は非常に幸せになるだろうと思います。それをどういう言葉にするかについて、今、私は、これに代わる具体的な文言があるわけではありません。

今の学びのところで、ちょっと一言。教育現場、先生は、大事ですが、私は、今や教育現場というのは、学校だけではなくて、職場であり、コミュニティであり、そして家庭だと思います。その4つがみんな一緒に前に向かないと、ある方向に向かないと、なかなか若い人のメンタリティーを変えることはできないかなと思います。先生、教育現場を変えることに全く異論はありませんが、それに任せているだけはいけません。先生方は、いや、わかっているんですけど、ちゃんと受験に役立つようにしないとPTAがうるさいんですよとこう言うかもしれません。責任逃れのなものかもしれませんが。

やっぱり家庭も相当大事です。今のお母さん方は、今の教育体系の中で育ってきているので、それでいいと思っているかもしれませんが、お母さんたちの教育というか、家庭も変わらなくちゃいけない。

職場もそうで、若い人が、今日、6時で音楽会に行きたいのでと言ったら、ああどうぞ、行けよ、行けよ、と言えるような職場にするということも大事かなというふうに思います。

(濱田会長)

すみません、ありがとうございます。ではちょっと論点2のほうに、ちょっと戻りまして、中山委員、いかがでございましょうか。

(中山委員)

9ページから行きますと、人生を楽しむとか、確かな暮らしとか、夢を持ってとか、居場所と出番という話ですけれども、我々、勤労者ですので、働くということが、これら全てにかかわっています。働くからこそ楽しいし、働けるからこそ楽しい。夢も持てるし、確かな暮らしがあるということですね。申し上げたいのは、これは、知事がおっしゃっていたかもしれませんが、郷学郷就、ふるさとで学んで、ふるさとにしっかりと就職ができるという、この体制をどうつくるか。誰も出たくて出ていくわけではなくて、参考資料の意見のほうも全部読ませていただきましたけれども、ほとんどというか、かなり産業と雇用に対しての意見が、こうしたら雇用が醸成できるよというような話がございます。ぜひ、今申し上げたような、長野県として、長野県に生まれたら長野県で学んで、長野県で就職ができて、一生、そこで送れるという、こういう社会がいいのかなというふうに思うわけでございます。

それから、あとは、12ページの「いのち」を守るというところでございますけど、これも、春日委員もおっしゃっていましたが、最近、地域の絆とか、地域コミュニティが本当に損なわれつつあるということでございます。

白馬の神城断層地震で、私も行ってみましたが、あれだけの地震でお亡くなりになる方が誰もいらっしゃらなかった。この時間だとおばあちゃんがどこにいたかというのわかってるんだと、そのくらいの地域の絆、それから地域コミュニティの創造、これをしっかりやっていっていただきたいということをぜひお願いしたい。

あとは、13ページでございますけれども、生きる力という教育の部分でございます。私は、長野県人というのは、周りから理屈っぽいね、理屈っぽ過ぎるよっていうのをよく言われたことがあります。何を申し上げたいかという、生きる力を身につけると同時に、みずから考える力、これがないとだめだろうと。だから自分から考えなさいと、そして他人にそれを主張しなさいと、そういうことをぜひ入れていただければありがたいのかなというふうに思います。

あと1点だけちょっとわからなかったのが、12ページに戻って、生きることへの包括的支援という、ここだけ何かかなり大きくなっています。ほかのところはかなり論点が絞れているんですけど、一方でこの生きることへの包括的支援というのは、これから細かいところをやっていくんでしょうけど、どういうイメージなのかお聞ききたい。

(伊藤総合政策課長)

すみません、言葉が躍っている部分は本当に申しわけないんですけど、想定しているのは、メインは自殺対策、それから交通事故とか事故への対応、そんなことを想定していま

す。

(中山委員)

ありがとうございます。

(濱田会長)

ありがとうございます。よろしいでしょうか。それでは野原委員、お願いいたします。

(野原委員)

もとへ戻ってしまうような意見なんですけど、いわゆる総合計画ということで、長野県のことからの、どういうふうになりたいかということを表すわけですね。

それで、いろいろこう総花的に列挙されているんですけども、どうなりたいためにこういうことが必要なのかということも議論して、長野県がどういう県になりたいのかということを示す必要があるんだろうなと思います。議論としてこういうふうに整理していただくことについては、非常にありがたいんですが、長野県はどういう県にしたいのかということ、ここできちっと議論をするということが非常に大切じゃないかなという、そういう感じがいたします。

特に行政という立場でいきますと、最近、長野県観光機構のほうでは、観光DMOという、長野県DMOのいわゆる候補法人として登録を、内閣府にしたのですが、実際に観光面を考えるのは、市町村であってみたい、地域なんですね。ですから、長野県の観光機構が、DMOの組織として、自分たちが持っている「タマ」っていうのは何もないんですね。その地域が観光の資源を持っていてやるんですね。それをどういうふうには指導していくかという、いわゆる調整の役割で、行政と同じような感じになるんですね。

ですから、地域のところで育ったものを寄せ集めてやるのがDMOの仕事ではないということで、最近、いろいろ議論しているんですけど、そういう立場で総合計画をつくる場合に、どういう方向へまとめて行くかというものが無いといけない。

行政の総合計画っていうのは、非常に難しくてご苦労されていると思うんですけども、やはりちょっと組織的に、各部門が縦割りに分かれていますよね。そうすると、行政というのは全て、いわゆる産業から厚生福利まで全部やらなきゃならない。それで教育までやらなきゃならない。そういうようなものを全部列挙していった場合に、長野県は何をしたいのかっていうのが、我々に見えて来ないし、非常に理解がし難いという問題があるんですね。

ですから、観光の場合でいけば観光大県をつくる。観光大県というのは、世界水準を目指すんだ。それは山岳を中心にいくんだ。ほかの県にないものっていうのは、アルプスが3つあるところは、ほかにはないんですね。ではそこをどうやって生かしてやるかという具体論に入っていくって、それで世界水準っていうものを目指そうということで、各地域に指導しているんですね。

そういう観点から言うと、現状の計画案では産業の生産性の観点であってみたい、新たなライフスタイルの観点であってみたいとか、様々な項目は並んでいるんですけども、何か目指すところの方向性がはっきりしなくて、長野県はどういうところへ向うために、

今、これをしているのかというのが、私自身として非常に、今、整理ができない状態でございます。その辺のところを少し、今後、議論していただく必要があるんじゃないかなというふうに思っておりますので、意見としてもそのぐらいしか申し上げられないところで申しわけないんですが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(濱田会長)

多分、今日の議論でいくと、長野県らしさとか、いろいろ出しているのは、その方向性をつけるために、いろいろなご意見をいただいているということでございますので、次の回には、そこのご意見をいただいた中で、長野県らしさがこうだから、長野県をどうするのかっていうようなものを、ちょっと打ち出していければなというふうには思っているところです。

今、野原委員のおっしゃったところの点については、また次回、検討した上で提示をさせていただきますと思ひます。それでは藤原委員、いかがでございましょうか。

(藤原委員)

12ページの人と自然の「いのち」を守るというこのテーマですが、まず、木と森の文化の創造です。長野県は、ご案内のとおり、全国屈指の森林県でありまして、相当、森や木にかかる文化が育っております。御柱なんかは代表的なお祭りかと思ひます。そのほか、木地師(きじし)文化や杣人(そまびと)文化。特に木地師は、木曾だとか、飯山なんか、あれは木地師と漆器の文化だと思ひます。振り返ってみますと、そういうものがありながら、だんだんそういうものも少しずつ勢いが少なくなっている。何らかの形で、もう少しそういうものを掘り起こして付加価値をつけて整備する必要があるのではないかと。非常に潜在性がありますので、そういうものを掘り起こす必要があるのではないかと思ひます。

また、長野県がそういうものをしっかりやっければ、相当、強みになるかと思ひます。強みに変えていくには、多くの県民の皆さんが参画して、こうした森林資源や森林の空間などを多く利用して、暮らしの中のさまざまな場面で、木や森の恩恵を肌で感じるような、そんな取組が必要ではないかと思ひます。そういうことになると、これまで進めてきました森林整備や管理に加えまして、生活の中や教育の中で、女性や障がい者、また子どもや高齢者など、さまざまな人たちが、森林を活用して行う文化や教育、研究等にかかる活動やさまざまな産業との連携をして、森林や木材の活用などを促進する必要があるかと思ひます。

そういうことになると、やはり林業というのは、経済林業や生産林業だけでなく、もう少し付加価値をつけて、文化林業や福祉林業、教育林業、医療林業ぐらい幅を広げて、森や林を使いこなすという、また教材や資源として使うということが重要ではないかと思ひます。自然からの反対給付を大きくするということが、絶対これからは必要ではないかと思ひます。

それとまた、森林というと山というような感覚になりますが、山の中の森林だけでなく、もっと身近な場所で森をつくり出す必要があるのではないかと思ひます。そういうものの整備です。これは、今までも里山整備でやってきたわけですが、むしろ荒廃農地を平

地林化をしたり、また、今、花の世界ではガーデニングなんて家庭の庭まで開放して紹介をしておりますが、屋敷林等もやはり整備をして、農村の風景の一つとして捉えて開放していく必要があるのではないかと思います。そういう新たな木と森の文化をつくり出していくと、観光面などにも相当貢献するような気もします。

それからもう一つは、やはり山の緑と心の緑です。まずは、やはり人心緑化ですよ。こんなに子どもたちが荒れたり、人間が荒れてきているときに、やはり緑というものを別の感覚で捉えて、やはり人の気持ちを緑化していくという、そういう役割を果たす必要があるのではないかと思います。ぜひそういう捉え方も林業の中でしていったらどうかと思います。

それからもう一つ、学びの県であります。個性的な学校誘致などの多様な学びの場づくりということがあります。今、会長さんも、大分、地方大学で悩んでおりますが、これは地方大学だけでなく、やはり地方の教育の問題かと思えます。

今、日本中で地方創生のため頑張っておりますが、頑張っているところを分析してみると、そこには何らかの仕掛け人、やはり人材がおります。何といたってもやはり地域振興というのは人材かと思えます。ですから、東京では、今、東京に相当大学生が集まっちゃってどうにもならなくて、新しい学科は制限しておりますが、個性的な学校誘致や学科の創設みたいなのを、やはり地方でもう少しつくっていく必要があるのではないかと思います。例えば農村福祉学科だとか、信州農業学科だとか、カラマツ森林学科とか、私は前から言っている高冷地野菜学科とか、本当に長野県の特徴のある学科をつくって、そこでしか学べないような教育の場づくりというのが非常に重要ではないかと思います。

人口がどんどん少なくなっていくので、これからは何といたってもやはり人をつくっていくかなければいけない。今の地域社会を維持していくには、もう人の数だけではどうにもならないわけでありまして、個人の資質を高めない限り、今の現状の社会は維持できないということでもあります。人の価値を高めていくという、民力を高めていくということをしっかりやっていかなければ、今の状況を維持することは非常に難しいと思っておりますので、ぜひこの教育の問題は真剣に取り組んで、真剣に計画の中へ盛り込んでいただければと思います。以上です。

(濱田会長)

ありがとうございます。木と森というのは、非常に重要な点だと思っております。信州大学の今のキーワードの一番最初に出ているのは、実はグリーンなので、それでは信州大学になってしまうかもしれないんですけども、ぜひその辺も生かしたいろいろな施策が必要かなと思っております。それでは山浦委員、お願いいたします。

(山浦委員)

感覚的なことを申し上げて大変恐縮なんですけど、これは5年計画で、10年先、20年先を見つめてつくれとこう言っているんですけど、このごろの行政のあり方っていうのは、私は、多少気になります。気になるというのは、イベント行政。非常にイベントばかりやっているというイメージです。それで、基本的なことはあんまりやらないと私は思っています。

長期計画はやっぱり構造改革なんですね。社会の構造改革。構造改革のところは行政し

かできないんですよね。民間ではできない。ということをよく捉えて、教育のインフラもそうかもしれませんし、交通インフラとか、いろいろなインフラがあって、そこを整備するっていうことをきちんと、10年、20年、5年でもいいですが、そういうところでやっぱりきちんと押さえていく必要がある。

どこかへ行って、例えば農産物売りますなんて、そこら中でやっているんだよね。金融機関も東京でやっているし、県もやっているし、もう何だかわからないくらいやっているんですよね。こんなことじゃなく、もっと違うことをやるべきじゃないかというふうに思うんですね。ですから、協働でどこかが分担するというのを、やっぱりきちんと考えていく必要があると、私は思っております。

それと、資料を見て、いろいろ書いてあって、多分、落ちている分野はないくらいに出ているんだね。もうほとんどの分野が出て、これだと、もう何をやっているんだか、よくわからないということと、もう一つ、言葉の遊びがあって、さっき自殺対策だとおっしゃったけど、あの言葉を見たって、何をやるかとしているのかわからない。見ていて、ほかにもそういうところがあるんですね。項目を見ていると、すぐ想像ができない、何をやるか、そこはやっぱり明らかにすること。

もう一つ、さっきどなたか言われたんですが、一つをやれば、ほかのことも解決するようなものが結構あるんですね。みんなやろうとすると、ちょっとずつ、ちょっとずつやっているだけなんです。だから一つのところへ焦点を当てれば、それによって付随的に解決されることが、この中には結構あるんじゃないかと思うんです。その整理をすべきだと思うんです。

絞り込んで整理をする。そこをきちんとやっていって、行政がやはりやるべきことをきちんとやって、それは例えば、産業の育成なんかをちゃんとすれば、さっき言ったように、東京からもみんな人が来るようになるんです。優秀な人が来る。優秀な人が来れば、それはさっきもおっしゃった石川県じゃないけど、人口も増えると、こういうことになって、そうすると商業も活性化してきます。産業循環じゃないですけど、そういうふうになるから、焦点を当てて打ち出していくということが重要じゃないかというふうに思います。

それと、教育の問題。いろいろ出ているんですが、私も教育については意見がある。こんなことを言うと怒られちゃうかもしれないけど、あんまり思っても言わない人がほとんどじゃないかと思うんで、あえて言うけど、長野県は教育のレベルが低い。昔はよかったんですけど。これをどういうふうにかつていうことは、やっぱりきちんとここで考えるべきだと思うんです。何か各種学校をつくるとか、それもいいんですが、そもそもレベル低いのを上げるという、その根本をやっぱりきちんと考える必要があるんです。それをやらないと、本当に教育にならない。

経協も、どういう人をほしいですかというアンケートを企業からもいっぱい出ているんですけど、あれを見るとやっぱり、粘り強いとか、創造力があるとか、執着心があるとか、そういう人を採りたいとこう言っているんですよね。そこがなくなっているんだね、今の人たちは。

そういうものをやるにはどうするか、そういうものを取り戻すにはどうするか。私は、教育の問題は、やっぱり家庭教育からだと思っていますので、中学や高校をつくったからって、家庭教育をきちんとしておかないと、幼児教育をきちんとしておかないといけない。

一つ、企業的に言えば、今、心身症みたいになっている人が山ほどいて、うちの銀行、多分県庁さんにもいる。そういう人がどんどん発生しているんですよね。なぜか。私は我慢できないからと、こう勝手に思っている。我慢することを子どものころから教えないから。親がだめだから、買ってくれと言えはすぐ買ってやる。昔は誰も買ってくれなかった。

そういうようなことをやっぱり社会の風潮として言っていくということが、具体的にはないけど、そういうことを教育していくような雰囲気をつくるというようなことを、教育委員会がやるのか、どこがやるのか知らないですけど、やっていく。県を挙げてみんなで我慢するいい子をつくるぞ、みたいなことを、キャンペーンを張っていくというようなことが、価値あるかもしれない。

やっぱり強い子をつくる。ある意味でひとり立ちできる人というのになるかもしれませんが、そういうことをやっていくということを、ぜひやっていただきたい。これは教育委員会の問題なのか、ちょっとよくわからないですけど、いずれにしても、もう長野県の教育はレベルが低い。これをどうするか。

それからまた産業教育。その上に立って産業教育ですよ。ぜひ、そういうことを、教育の根本について、きちんと議論していただきたいなと私は思っております。以上であります。

(濱田会長)

ありがとうございます。今日、いただいた意見で、今おっしゃった、一つやればいろいろできるというキーワードは、多分、幾つか出たと思うんですよね。それを、尖った政策として掲げていけば、野原委員の言った何になりたかというのもおのずと見えてくるのではないかというふうに私は思っております。今の論点2のご意見っていうのを十分に検討させていただいた上で、次回、またそれを出していきたいなと思っております。

あと論点3について、これから入らせていただきます。ここは、今の話をまとめる形になっておりますので、おそらく、今日、議論するというよりは、次回、またその議論になるかと思えます。論点3についても事務局のほうで、説明をお願いいたします。

(伊藤総合政策課長)

お願いします。14ページですけど、基本目標についてです。一番最後におつけしております、現行のA3用紙の参考資料5がありますけれども、これをご覧いただきますと、左側のちょっと上のところに、現行の計画の基本目標ですけど、「確かな暮らしが営まれる美しい信州」ということで掲げてあります。これをベースとしつつ、一昨年、地方創生のための信州創生戦略では、「人生を楽しむ」と掲げております。これは、資料の15ページをごらんいただきますと、基本方針としまして6つありまして、その筆頭に掲げた「人生を楽しむことができる多様な働き方・暮らし方の創造」に当たります。

昨年11月2日の第1回目の審議会におきまして、次期5か年計画の位置づけの一つとして、この信州創生戦略を統合するという旨をお話しして、ご了解をいただいたところです。皆さんと一緒に作り上げました、この信州創生戦略の趣旨なんですけど、ここで目指すものは、「長野県で暮らし、活動する全ての人が、みずからの能力を発揮し、人生を楽しむことができる県づくりです」という基本があって、その上でこの6つの基本方針の筆頭と

して「人生を楽しむ」ということを掲げているということをご理解いただきたいと思います。

ですので、単に現行の計画と信州創生戦略を足したように見えますけど、これ、単なる並列ではなく、将来に向けて「人生を楽しむ」といいますか、今も言いましたように、その一人一人が、個性・能力を発揮して、生きがいを持って充実した生活を送ることができるようにするためには、当然、その基盤となる「確かな暮らし」というものを、産業ですとか、教育もそうなんですけど、しっかりしていかなければならないということです。

どちらかという、「確かな暮らし」プラス「人生を楽しむ」ということではなく「確かな暮らし」のもとに「人生を楽しむ」という趣旨で、このワード2つを並べさせていただきました。これを基本として、今後、またいろいろ検討していきたいと思っておりますので、ご了解をいただきたいと思います。

(濱田会長)

今、説明いただきましたように、「確かな暮らし」の中に、教育がちゃんとしているとか、産業がちゃんとしている、いろいろなものが込められてはいます。それとあとは、「人生を楽しむ」というところ。これ、言葉としては、豊かさを実感するとか、いろいろな言葉があるかとは思いますが、その2つの部分っていうのを、一応、キーのコンセプトにしてということで、今、説明いただきました。

もう時間があまりなくなってきましたけれども、このコンセプトで検討する、2つの言葉をコンセプトとして検討することについて、現時点でご意見等ございましたら、お願いいたします。これは、多分、また次のときにも議論することになるかとは思いますが、では安藤さん。

(安藤委員)

ちょっと確認なんですけど、この「確かな暮らし」と「人生を楽しむ」とありますが、ここだけ聞きますと、個人に焦点が当たっている。だけど本当にそうなのか。我々が今、目指しているのは、例えば若者が挑戦できるとか、女性が輝く社会とか、それから生涯、社会参加できる社会とかで、そういう目指すものを実現する目標にすべきではないか。さっき野原さんも言うておられましたが、どういう社会を目指すのかということです。

ですから、計画としては、ちょっと別の言い方のほうが、みんなが目標にできるんじゃないかなと思うんですけども。

(濱田会長)

そんな気は私もします。ですので、今日、論点2のところを重点的に長くやったのは、そういう意味で、そこを考えなきゃいけない部分があるのかと思います。では小林委員、いかがですか。

(小林委員)

先ほどの山浦さんのご意見に強く賛同します。8ページ目に、次期総合計画は、夢が持てるもので、長野県の特徴が出ていて、そして的を絞って尖っているものにするって書いて

であるんですけど、だんだん離れていっているような気がしています。たくさんの人の意見を聞くことは大事ですが、それに従って論点は増えていくし、総花的になり始めている。加えて、主観ですけれども、例えばこの今回の最後のキーワード「確かな暮らし」「人生を楽しむ」も、とても堅実なイメージだったり、あるいは能動的に変化に挑むというよりは受動的なニュアンスを感じる。今日の資料の前半部分は、すごく躍動感のある変化を感じる、時代の流れとか変化を感じるものだったのが、急にスタティック（静的）になっている気がします。すみません、あくまでも主観です。

（濱田会長）

今日の議論を踏まえれば、私もそんな感じがします。一番最初にあった尖ったものっていうのが出ていますので、どういうふうなものを中心に据えるかっていうのが、そこに向けて議論した方が私もいいと思います。

今日、時間がもうほとんどなくなりましたので、皆さんのほうで、逆に意見を事務局のほうに出していただきたいと思うんですね。こういうふうなコンセプトがいいいんではないかというのを。だからそれを出していただいた上で、今日の議論も踏まえて、事務局のほうでまとめた形で、次の回に臨みたいというふうに思っています。それでよろしいでしょうか。そうしないと、これで議論しても、多分、議論は進まないかなというふうに思っております。ぜひそういう形にさせていただきたいというふうに思っております。

特にほかに皆様のほうでご意見ございますか。よろしいですか。ではそういう形にさせていただきたいというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

もう時間があと10分弱になってまいりましたので、今日の議論としては、こういう形にさせていただきたいと思います。いろいろ貴重なご意見いただきまして、ありがとうございました。

それで、これまでの当審議会での議論は、1回目が「長野県の将来像」「長野県の強み・弱み」、それで2回目が「計画策定の基本的視点」「長野県の課題」「何に重点的に取り組むべきか」について、意見交換いただき、それで前回の第3回では、ゲストの方、3名お越しいただきまして、いろいろな点でお話、「産業」と「教育」について掘り下げた議論を行って、今日は、最初が「現状認識」、長野県らしさというのは何か、それで「重点政策の方向性」ということです。

「基本目標」につきましては、もう一度、今日の議論を踏まえた形で提示させていただくというのと、皆さんからぜひ意見をいただきたい。確かに小林委員がおっしゃるみたいに、総花的でないと言いながら、今日はいろいろな点を議論しました。そのどこに絞るかという意味で、総花的に出させていただいたという理解をしていただければと思っております。

それで、次回は、8月を予定しております。最終の答申というのが11月に行う予定ですので、次の回でほぼ最終的なものにつくり上げていく必要がございます。ですので、そこに向けて、ぜひ今日の最後の目標につきましては、事務局のほうに皆さんから意見をいただきたい。それでまとめた形で、多分、8月はなるかと思っておりますけれども、次の最後の議論的なものに、向かっていきたいなと思っておりますので、ぜひよろしく願いいたします。

(3) その他

(濱田会長)

ほかに皆様のほうでご意見等ございますか、よろしいですか。事務局から、ではお願いいたします。

(宮島企画幹)

それでは、事務局から2点ほどご連絡を申し上げたいと思います。まず最初に、次回の開催日程についてのご連絡でございますが、次回につきましては、平成29年8月25日、金曜日を予定しております。詳細につきましては、後日、ご連絡を申し上げさせていただきたいと思います。

また、先ほど会長からお話がありました基本目標等についてのご意見につきましては、またどのような形でご意見をいただくかということ、また後ほどご連絡をさせていただきたいと思います。よろしくをお願いいたします。以上です。

(濱田会長)

それでは、特にないようございまして、以上で本日の会議事項を終了とさせていただきたいというふうに思っております。委員の皆様には、会議の進行にご協力いただきまして、本当にありがとうございました。それでは、事務局にお返ししたいと思います。

4 閉 会

(宮島企画幹)

本日はお忙しい中ご出席をいただきまして、また、熱心にご審議いただきまして、まことにありがとうございました。以上で、本日の長野県総合計画審議会を終了いたします。どうもありがとうございました。